

老人の死は明らかに心臓病によるものだった。私は、幸運にも、老人を死が襲った直後にその家に来あわせたので、死体の傍に坐り込むことができた。私は、生まれてはじめてイスラムの葬式を目撃した。本の筋書き通りに、文字通りイスラム式に、死体は親類縁者の肩に担がれて、墓地に運ばれ、埋葬され、またたくまに、葬式はおわった。その日、私は、ドンキレクの住民のなかに、かなり融け込むことに成功した。これに続いて、もう一つの幸運が私を待っていた。老人の死の数日後、あるクルムから別のクルムへ、家の引越しがおこなわれた。ドンキレクでは、家の引越しは、文字通り、家ごとかついで、別の場所に運んで行く作業を意味する。住民の集団作業の典型的な事例であるといえようが、毎年見られるわけではない。引越しは、金曜日におこなわれた。回教部落である以上、ドンキレクでは、金曜日の正午過ぎに、集団礼拝がなされ、江戸部落のマサジットに、部落中の男衆が集まってくる。私は、毎金曜日の昼下がりに、マサジットの入口に立って、かれらの祈禱の一部始終を観察する。回教徒の礼拝には、世俗ばなれした音楽性と没我の演技があり、みるだに美しい光景であると思う。ドンキレクでは、礼拝のまえに、「プラチュム」という時間がもたれ、部落民への伝達事項が、アーマッドないし

トイマム（導師）のおごそかな声で、男衆に読み上げられる。「プラチュム」とは、会議、の意味である。その日のプラチュムでは、トイマムが、家の引越しの希望があるから、礼拝後全員担ぎに行くように、と男衆に命じた。礼拝がすむと、男衆たちは、礼拝用の清潔な衣裳のまま、引越しの現場に赴いた。そこから家を担ぎ、約1キロ離れた地点まで運んで行った。家は、ゆっくりゆっくり動いて行った。私も、かれらにまじり、家を担ぐ仲間に加わった。150人程で担いでも、1軒の家は、私の肩に喰い入るように重かった。しかし、その1キロの長い道程のあいだに、私は、ドンキレクの住民と、より深く融和することに成功したのだった。

私の調査は、このような幸運からはじまった。そして、ドンキレクは、いつしか、私にとってすばらしいラボラトリーになった。

現在、ドンキレクは田植が完了したところで、いま西瓜植えの最中である。ソクラー地方は、まだ雨季が終らない。毎日の雨と、目前に迫った断食月とが、ドンキレクの住民をせわしく仕事に駆りたてている。かれらのせわしい動きは、私をも忙しくすることはいうまでもない。それがまた、楽しい。

（12月27日・ソクラー県パウオン村にて）

タイ・カセツェート大学から

福井捷朗

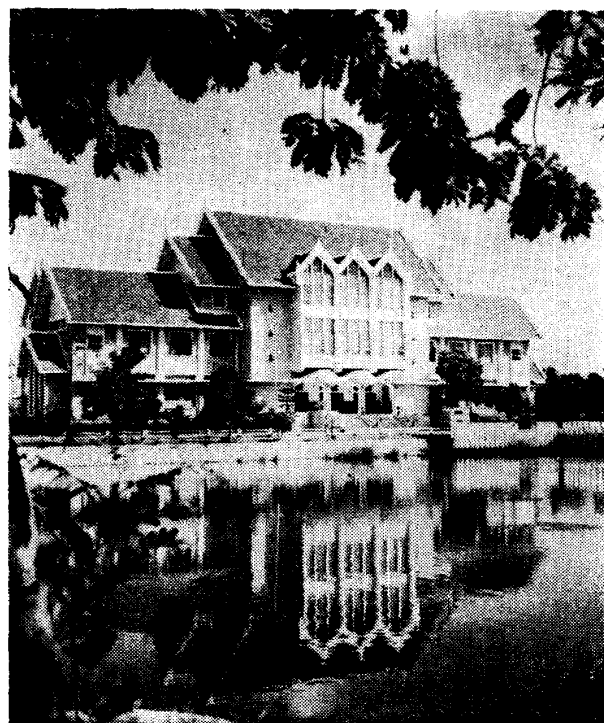
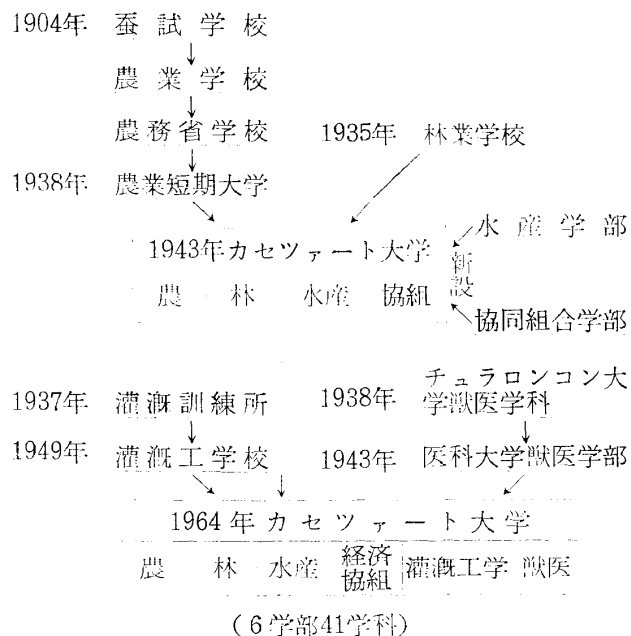
現在タイ国には7つの大学がある。すなわち、唯一の総合大学であるチュラロンコン大学、農、法、医、芸術の4つの単科大学、それに昨年発足したばかりのチェンマイ、コンケンの二地方大学である。これらは全て国立大学で、私立大学設立の噂は聞いているが、まだ実現は大分先のことのようにである。

「カセツェート」というのはタイ語で「農業」という意味で、したがって、「農科大学」というのが翻訳名になる。その略史を第1図にまとめてみた。現在タイの大学はすべて首相直下の「Office of Prime Minister」の下にあるが、たとえばカセツェート大

学の場合には、1962年までは農務省の管轄内にあった。現在直接には、大学は大学管理委員会によって管理されているが、その委員の顔触れは首相を議長、学長を副議長とし、6人の学部長、事務局長、それにこの委員会の推せんによって国王が任命する委員など合計30名からなっている。

カセツェート大学は図に見られる通り、現在6学部、41学科からなる。各学部の学科編成は省略するが、その特徴は、たとえば農学部には生物、化学科や、英語学科があったり、灌漑工学部に数学科があったりすることである。しかし、これらは来年度からあら

カセツェート大学（農科大学）略史図



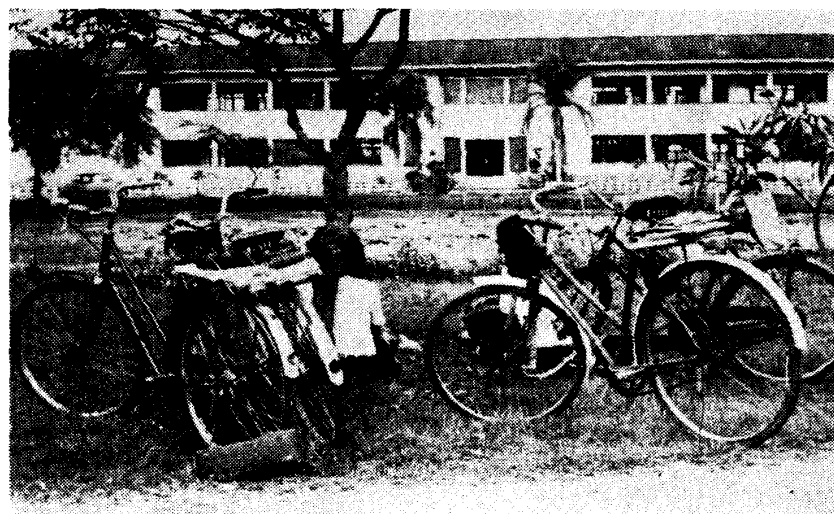
カセツェート大学本館

たに増設される予定の文理学部に移り、また将来は、現在の「経済学協同組合学部」を「経済経営学部」に、灌漑工学部を工学部に改めることなどにより、単科大学から総合大学へと発展して行くようだ。

普通タイの大学は4年制が原則であるが、カセツェート大学は一年多く、5年制の大学となっている。大学院は最近発足したばかりで、マスターコースだけのが農業経済学科、農学科、畜産学科しか設けられていない。

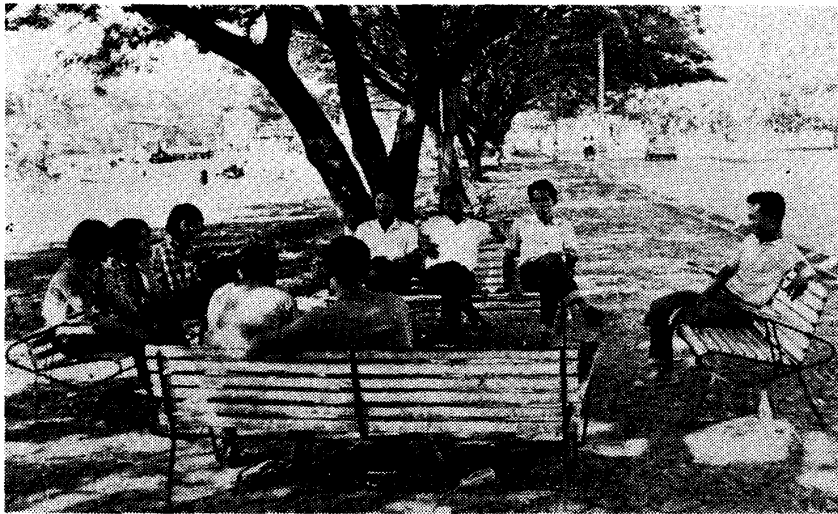
バンコック市の北方郊外にあるドンムアン空港から

市内へ車で入る途中、最初の左への曲り角から左手に用水路をへだてて長く続く生垣がカセツェート大学のメインキャンパスである。面積560エーカー、広々とした緑の多い公園のような構内に点在する涼しそうな建物、正門にそびえる寺院風の本部構堂、立派な学生寮などがあり、京大のバンコク・オフィスのある下町よりは幾分涼しく、風向きの加減で時々流れてくる畜産学部の畜舎の悪臭を除けば、バンコクでは比較的住みやすいところだろう。



カセツェート大学農学科

ここは Bangkok Dark Heary Clay といわれる、粘土含量が多く、小石を拾おうにも見当たらないといった低地水田地帯にあり、雨期には道路と建物の内部以外は水につかってしまうところだ。在学生数2,393名、(うち男1,783名、女610名)。その大部分がこのキャンパス内の寮に住み、また教官住宅もかなりキャンパス内にある。大学のキャンパスはこの他に、獣医学部、灌漑工学部が別にある。それ以外に、試験農場が3カ所、水産訓練所が1カ所、演習林が3カ所、それぞれタイ



カセツェート大学構内

国の各地に散在している。

大学の制度自体はアメリカの大学に近いものであると思われる。すなわち講座制がない。ただ教官組織はイギリス式であって、正教授といわれる教官は10人、Visiting Professor が7人、そのほか助手まで含めて、Staff teacher といわれているのが全部で378名（うち男290名、女83名）である。これらの教官は大きく二つに分れる。つまり管理、運営を主とするものと、教育、研究を主とするものとである。だから学生にたいする指導は生活のあらゆる面にまでかなり徹底しており、学生達は試験に追われているようである。しかし、逆に教官は、一人当たりの時間数、学生数が多く、研究活動は設備、財政問題とも重なって、随分制限されてしまっているようである。

大学の財政は国家予算として1964年度に210万バーツ、日本の金でおよそ4億円、演習林からの収入が約6千万円、そのほかに会社、個人の寄金がある。これら直接の財源とは別に、カセツェート大学は米国のオレゴン州立大学、ハワイ大学とそれぞれ交流があり、ロックフェラー財団の援助も受け、出張教授、機器、図書などの援助、留学生のひきうけなどがかなり行なわれている。なおアメリカ平和部隊の活動の一部として、現在2人の若いアメリカ人が英語教師としてここで働いてい

る。先にも触れたが、1962年まではこの大学は農務省に属していたという事実からも、わかるとおり現在でも農務省との関係は深く、米穀局の技術部などの建物が大学のキャンパス内にあり、その職員が講師になったり、学生達の卒業論文作成のための指導教官になったり、ときには実験室を提供したりして協力している。

大学入学試験は国家試験として、国家教育委員会によって一斉に行なわれ、その4～5倍という競争率の中からえられた学生達がそれぞれ

の志望にしたがって各大学にふりあてられる。暑期明けの6月中旬に新学期が始まり、途月10月から11月にかけて1ヶ月の休暇をはさみ、翌年3月に学年年度の終りとなる。

はじめの1、2、3年が教養学部に対応するわけだが、高等学校のレベルが低いためもあるが語学をはじめかなり基礎的なことから始めているようだ。たとえば、筆者と同じ寮の部屋にいる経済学部的一年生はカエルの解剖をしている。しかし、かといって専門学科は全て4年以降というわけでもなく、カエルの骨と一緒に「一般農業経済学入門」の教科書を持ち歩いているといった調子である。大学の授業は原則としてタイ語しか用いないが、学術用語はほとんど英語で、しかもそのタイ語にたいする割合が非常に高いようだ。



学 生 寮

外国語はいい高等学校では英語以外にフランス語またはドイツ語をほんの少しばかりだがとにかく教えるそうである。しかしカセツェート大学では英語一本槍である。一般的にいて、日本の学生にくらべて会話はできるようだが、読解力はあまりよくないようである。たとえば大学の1、2年生用の英語の教科書は語いを1000語に限られたものである。出版物の少ないのは低開発国の常であるが、ここでもその例に洩れず、タイ語で書かれた大学の教科書、専門書は講義プリント以外はなく、洋書の高価なこととあいまって、この英語読書力の不足が大部分の学生達にとって大きな障害になっているように見受けられる。

学生達の日常生活は概して規則正しい。出席をとられるせいもあるが、さぼる学生はあまりない。また大部分の学生は経済的にあまり余裕がなく、平均400バーツ（約7～8千円）で1カ月を暮している。したがって、そういうわけでもないのだろうが、学生達のスポーツ、娯楽などはもっぱらキャンパス内が多いようだ。母校愛、上級生、下級生の折り目はかなり強く、学生自治会は政治活動を全然しない。大学内の秩序を守り、学生達のよりよい精神的、肉体的環境をつくりだすのに相当役立っている。たとえば、種々の学内行事を企画したり、出版を行ったり、売店を経営したり、ときには品行のよくない学生を懲罰の意味で川水路にほうりこんだりする。それだけに、学生達が町へ出掛けたりするときは服装もきちんとし、一般に

対する模範を示そうという気持が見られる。たとえば乗物の中で率先して席をゆずったり、酔っ払いを食堂からつまみだしたりというようなことをよく経験する。

このように学生々活は日本のにくらべ、色々な面で随分きちんとしたもので、少し窮屈気味なところもあるが、そのなかでも何といっても一番大きいのは落第、中退制度である。入学した学生の半数近くが5年間に落伍してしまう。上級生が尊敬を受けるのもあながち理由のないことではない。そして残った半数の精鋭達が晴れの学位授与式に臨み、ガウンをつけ四角の帽子をかぶって、国王陛下でずから学位記を拝受することになる。

1942年カセツェート大学発足以来の卒業生総数は、男1,751名、女248名の合計2,009名にすぎない。このうちの95%が農務省を主とするタイ国政府官吏、3%が民間企業（主として外国会社のバンコク支店など）、残りの2%が自家の農場主となっている。

カセツェート大学がタイ国唯一の農科大学であることや、その卒業生の就職状況、大学の発展の経緯などから分るように、タイの農業を将来どうやっていくかという大問題が、まず大学の自治、学問の自由を云々する以前のものとして立ちはだかつており、その意味では種々の欠点は多々あっても、全体としては、その方向に向かってとにかく人材を送り出していると云えよう。

エール大学だより

酒井敏明

ペンシルヴァニア州ルイスバークのバックネル大学で約2カ月の予備講習を受け、去年の9月はじめにニュー・ヘヴンに着きました。その後の4カ月間の見聞を簡単に記します。

ご承知のように、エール大学はハーヴァード大学とならんで、アメリカとしては早くから外国研究を精力的に進めて来た大学の一つで、伝統ある名門であることはいうまでもありません。1841年にアメリカで最初

のサンスクリット語の教授が任命されたのはエールでありますし、その後主として言語、歴史、人類、地理の分野で、非西洋諸国の研究が進められて来ました。特に外国語教育の面では、外国人教師によるインテンシヴなオーラル・メソッドというべきエール・メソッドが確立され、第二次大戦によって急に大きな需要ができたためでしょうが、極東言語研究所（IFEL）が誕生しました。東および南アジア言語文学、スラヴ言